
ストップウォッチ

クリボー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストップウォッチ

【Nコード】

N7209E

【作者名】

クリボー

【あらすじ】

ごく普通の会社員石神圭介が時を止める能力を手に入れてしまう。超能力を手に入れる事は幸せなことなのか？超能力を手に入れた人間が犯罪に手を染めた時、超能力者を捕まえることはできるのか？

所有者

所有者

「ピッピピ、ピッピピ」

携帯が鳴り時間を見る5時50分 …… 1回目のアラームが…

…あと10分ねれる……

「ピッピピ、ピッピピ」

6時 起きる時間だ

あまり寝起きは悪い方ではないと自負している。が朝ゆっくり寝てられれば幸せだろうな。

ゆっくりと起き上がり娘たちを見る。

ワイドダブルベットとシングルベットを並べて、4歳と2歳の娘たちと嫁 四人で寝ている。

相変わらず子供たちの寝像は悪いなと思いながら また平凡な一日の朝を迎えた。

嫁の作ってくれる朝ごはんを食べ、歯を磨き……

毎日、変わらずに過ごしている気がする。朝ごはんの内容は少し変わるが……

7時ちょうどに家を出る。会社まで車で30分 の通勤である。

通勤の途中に缶コーヒーを買ったためにコンビニによる。これも毎日の日課だ。

車を降りてコンビニに入る時に救急車のサイレンが聞こえた。

「近いな」などと思いながらいつもと同じブラックのコーヒーを手に取り、

レジへと持っていく。

値段を言われる前にお金をだす。120円支払い缶コーヒーを受け取る。

コンビニを出て車に乗り込もうと車のドアノブに手をかけようとした時、車のドアの下に黒い物体が目に入った。

その黒い物体に目を凝らすと安そうで、どこにでもありそうなストップウォッチだった。

あれ、こんなもの降りる時にあったかな？

と思いながら、そのストップウォッチを右手で拾い上げる。

安そうなストップウォッチに見えたが、実際に取ってみるとプラスチック製ではないようだった。金属特有の冷たさと重みがあった。液晶画面を見ると数字が動いていた。何気なく親指でボタンを押した。

「ピッ」……液晶の数字が止まる……

その瞬間 自分の周りの雑音がすべて消えた。

とても静かだ・・山奥に行っても鳥のさえずりや、風の音など何かの音はあるはずである。

怖いぐらいに周りが静まり返った。

周りを見回した。道路の方を見ると自転車に乗る学生が不自然な格好で止まっている。

自転車を運転している姿を写真で撮ったかのように、ペダルに足をかけながら倒れずに止まっていた。

なにが とうなった？混乱し始めた、コンビニの駐車場から道路の

方へ駆けて寄った。

すべての車が止まっていた。飛んでいる鳥も宙に浮いてとまっている。

気が動転している。頭に血液が大量に送られているのがわかった。何が何だかわからない。・・・

何が起きた・・・考える・・・自分に言い聞かせる

周りを再度見回す・・・自分以外が止まっている。って言うか動いていない。

そう、まるで自分以外の時間が止まっているようだ。

ん、何秒たった？30秒・・・1分・・・

承太郎やディオでも数秒しか時間を止められないのに・・・など思いながら

間違いなく混乱していたが、少しずつ現状を自分なりに把握してきた。

ふと、新たな不安が襲いかかった。

死ぬまでこのままなのか？元に戻す方法はあるのか？不安に押しつぶされそうになる。

そもそもなぜこう状況になった？

思い出せ・・・周りを見渡すと、目の前に不自然な形で止まっている自転車に乗る学生がいた。

思い出した・・・ゆっくりと右手を見る。

手の暖かさで手の温度と同じぐらいになった金属の黒いストップウォッチを握りしめていた。

液晶画面をみると液晶の数字が止まっていた。いや、俺がボタンを押して数字を止めたはずだ。
希望が少し見えた気がした。

このボタンを押して数字が動き出せば周りの世界も動きだすだろうか？

悩んでも仕方がない。恐る恐る親指でボタンを押す。

「ピッ」

キキー　ドン

自転車のブレーキ音のあと鈍い音と共に自転車がぶつかってきた。
自転車の学生は横に倒れ、私は少し反対側に飛ばされ倒れこんだ。
学生はすぐに起き上がり私の方に駆け寄る「すいません、大丈夫ですか？」

「前にいるのに気がつきませんでした」と言いながら何度も謝ってきた。

「大丈夫です。あなたこそ大丈夫ですか？」

「私は大丈夫ですが」

自転車の学生は肘に擦り傷、私は腕に打撲傷、手にはかすり傷ができた。

大した怪我でもないのに、連絡先は特に聞かなかった。学生は謝りながら、自転車で走り去った

悪いのは私である　突然彼女の前にとびだしたのだから。そう彼女から見れば突然現れたのだから。

携帯電話の時間を見る。もう7時20分になっていた。会社に遅れるので右腕をかばいながら車に乗り込み会社に向かった。

運転中の車の中で助手席においてある黒いストップウォッチを横目で見ながら先ほどの出来事を考えていた・・・

ストップウォッチのボタンを押したら周りが静止した。そうあたかも自分以外の時間が止まったかのように……音も消えた……

暗くはなかった……光はあるようだ……

寒くもなかった……温度もある……

火はどうなるのだろうか？………

などと考えているうちに会社に着いた。

もちろん大事なストップウォッチを鞆にしまい自分のデスクへ向かった。

大きな工場の中に出向で設計の仕事をしている。CADを使う仕事なので一日のほとんどをパソコンの前ですごす。いつもは真面目に黙々と仕事をこなしているのだが、今日はとても仕事に手が付かなかった。

鞆からストップウォッチを取り出し観察していた。

形は何の変哲もないストップウォッチだった。ただボディはプラスチックではなかった。手で持った感触から何かの金属であることは分かった。

色は黒。黒と言っても艶消しの黒だった。表面は意外とつるつるしている。

裏を見ると銀色のプレートみたいなものがあつた。

すっかり興奮して忘れていたが、これは拾ったものだった。本来は落とし主に返さなければならぬのだろうが、とてもそんな気にはなれなかった。

逆にこれからこのストップウォッチ、いやこの能力は何に使えるか？
そんなことばかり考えていた。

銀色のプレートを見る。「KEISUKE ISIGAMI」
同姓同名だ。

「Owner's name KEISUKE ISIGAMI」

オーナー・・・つまり所有者は私？ または 私の同姓同名？
その下を見ると

Manual・・・
と英語で書いてある・・・

英語は苦手なのでさっぱりわからない。そこで会社のパソコンで翻訳のサイトにアクセスをして書かれているアルファベットを打ち込んでいった。

取扱説明

右のボタンを押すと所有者以外の時間が止まります。

左のボタンで表示画面が変わります。「現在」↓「あなた」↓「タイムスウィッチ」↓「現在」

最後に時間を止めた人が死亡した場合、現在の所有者の所有権は強制的に放棄されます。

所有者がいない状態で最初に使用した人に所有権が移ります。

… 大体こんな内容か。なんかデスノートみたいだな…

最初の行『右のボタンを押すと所有者以外の時間が止まります』
は朝に実証済みだ・・・やはり時間が止まったのだ。

ただ翻訳内容があっているか不安だが「所有者以外の」とある。

つまりこのストップウォッチの所有者は俺だ。つまりこのストップウォッチは俺のものだ。

なんとなく嬉しくなった。体温が上がる気がした。

2行目の『左のボタンで表示画面が変わります。』「現在」↓「あなた」↓「タイムスイッチ」↓「現在」↓

『あなた』が気になる。ストップウォッチの左のボタンを押す。液晶の数字が変わる。

今度は数字が減っている。直感した。これは私の寿命だ。こんどは急に心臓の鼓動が速くなった。

「3787200000」、「3787199900」、「3787199800」、「3787199700」

急いで自分のデスクの引出しから計算機を取り出し計算した。まず3桁目の数字が 約1秒ごとに減っている。全部の数字から残りの時間を計算すると電卓をたたく

28年10カ月程度・・・60前に死ぬのか・・・

実際は3桁目が1秒かどうかわからない20パーセントの誤差で34年はずれる計算だ

ただ今日、明日が寿命じゃなくてよかった。ほっとして胸をなでおろした。

寿命以外で死ぬのか？寿命が0になったらどんな死に方をするのだろうか？

などと考えていると上司がやってきて「石神さん、ちょっと」

「あつ、すいません。今行きます」と慌ててストップウォッチをポケットにしまい。上司の元にいった。

自分の席に戻ってくるとまたストップウォッチを取り出した。いろいろと試してみたかったが周りに見られるのはまずいと思いまたポケットにしまった。

俺は超能力者だ・・・と心の中で思いながら仕事を続けた。

夜になるとこの能力を何に使用するか考えていた・・・ただ・・・考えているが良い使い方が思い浮かばない。

考え事していると夜眠れず、ちよつと寝不足気味だった。

何気なくストップウォッチを取り出し時間を止めてみる。

『ピッ』

とても静かな空間だった。

いつそのまま眠ってしまうか。などと考えて大きな欠伸をした。なにげなく、ストップウォッチの左のボタンを押してみる。

液晶が「あなた」の画面が変わった。

液晶の数字に目が釘付けになった。ものすごいスピードで時間が減っていた。

数字の6桁目が約1秒ごとに減っている。

つまり1000倍のスピードで減っていることになる。

あわてて、ストップウォッチ右のボタンを押して時間を元に戻した。フーと息をはいて、今までの位時間を止めたか考えた。

おおよそだが、トータルで30分ぐらい時間を止めた気がする。3

0分だと・・・

携帯電話の計算機を使って計算した。20日間寿命が縮んだわけか。

翌日の夜もベットに入ってからこの能力の使い道をいろいろ考えてみた。

手品師にでもなるか？いやそんなに儲からないだろうし人前で使ってストップウォッチのことがばれる可能性が出てくる、リスクが多すぎる。

時間を止めて強盗でもするか？ なんとなくスマートではない気がする。

あと考え付くのはのぞきぐらいだが・・・

犯罪以外にないのか……

そういえば「タイムスイッチ」ってなんだろう？

取扱説明 2行目

『左のボタンで表示画面が変わります。「現在」↓「あなた」↓「タイムスイッチ」↓「現在」』 気になってどうしようもない。ストップウォッチを手にとって、要するに「タイマー」のことだよな。右のボタンを押してタイムスイッチの画面にした。30000となっている。

右のボタンを押してみると30001 になった。

もう一度 右のボタンを押してみると30002 になった。

今度は右と左のボタンを同時におしてみた。数字は1になった。

右のボタンを押してみると2 になった。

もう一度押すと3 になった。

なんとなく理解した。右ボタンを長押しするとあつと言つ間に数字が増えていった。数字を500にセットする。

画面を変えて 右ボタンを押した 「ピッ」 また静かな時間がながれた。

約5秒後また「ピッ」と音がして風の音と子供たちの寝息が聞こえた。時が動き出した。

最初の設定は30000。約5分。

やはり30000に戻しておこう。30000に直しその日は眠りについた。

所有者2

所有者2

何日か過ぎ、晴れた日曜日の昼過ぎ、家族4人で大型のショッピングセンターまで買い物に行くことにした。地方なのでもちろん車で行くしかないのだが、駐車場が混んでいて少し離れた駐車場に止めることになった。

駐車場からショッピングセンターに歩いていると少年二人が見るからにガラの悪そうなチンピラ3人に絡まれていた。

それを見て私はニヤリを笑った。あのチンピラ達を懲らしめてやるう。今までの実験の成果を見せてやる。と心の中で思い、手に薄手の手袋を付けてポケットの中でストップウォッチがあるのを確認した。

娘に「何で手袋をつけるの」と聞かれたが。「内緒」と答えた。

少し離れた横を通る。ポケットの中のストップウォッチを握りしめた。

通り過ぎたあたりで、ストップウォッチを押した。

「ピッ」

その瞬間 自分の周りの雑音が消えた。

まず、足もとに石で立ち位置にしるしをつける。

急いでチンピラのいる所に近づいた、1人は後頭部を拳で3度ほど殴ってみた。

もう一人は近くにあった丸い石を頭部にめがけて投げつけた。投げつけた石は手から離れると空中に浮いた状態で停止した。

ここ数日でいろいろと試した。時を止めてペンを立ててそのペンをデコピンしてみた、あまり動かない何度か続けてデコピンをする。それでも動かない。

ストップウォッチを押して時を動かした。

時が動き出すのと同時にペン立ては2mほど飛んでいった。何度か試してみたが、デコピンの回数が多い方が遠くに飛んだ。

理論はわからないが瞬間的な衝撃は蓄積して時間が動き出すと共に合計された衝撃となるみたいだった。

そこで時間を止めた状態でボールを投げてみた、手から離れた瞬間にボールは空中に浮いた状態で停止した。時を動かす。時を動かすとそのままボールは投げた方向に飛んで行った。

時間を止めた中で物を動かすのは難しかった。慣性の法則ってやつか。下手に物を動かすと時間を動かした時にその方向に動いてしまっからだ。

今回、1人は後頭部を3回ほど殴った。おそらく気絶するはずだ。もう一人は石がぶつかって頭から血を流すだろうがこれぐらいやらないと反省しないだろう。

先ほどのしをつけた立ち位置に戻りストップウォッチを押した。心の中でつぶやく（時は動き出す）

「ドタッ」との大きな音のする後方を振り向いた。

チンピラ2人が倒れていて、倒れたチンピラを見ておどおどした少年たちは、そのうちに走って逃げて行った。

「あの倒れている人たちさっきの少年たちにやられたのかな」と嫁

が言う。

「そうなんじゃねーの」

「最近の少年はこわいねー、パパも気を付けてね」

「俺は絡んだりしないって」

などと話しながら横目でチンピラ達を見た。

怪我のなかったチンピラが倒れている2人のチンピラを介抱しながら、携帯電話で話していた。野次馬が増えてきたので買い物に向かった。

2時間ほど買い物をしてショッピングセンターから駐車場まで帰り道、例の事件のあった場所は野次馬でいっぱいだった。

野次馬を少し避けて駐車場まで行く途中、ガタイの良いおっさんと中肉中背の比較的若い青年に声をかけられた。

「すいません」

「はい？」と答えると

「そこであつた事件ご存知ですか？」とおっさんが聞いてきた。

「は？」と私が答えると横から嫁が

「喧嘩ですよ」

「目撃されたんですか」

「ハイ」と嫁がちよつと自慢げに言う。

「旦那さんも見ましたか」と聞かれた。

ちよつと言葉に詰まつた。たぶん警察関係だろう？不自然な行動だけは避けたいと思いながら、警戒したように

「あなた方はどちら様ですか？」

「あつすいません」と言いながら警察手帳を見せて質問を続けた

「旦那さんも目撃されましたか」刑事に聞かれた。

「はい、まー」

すると横からまた嫁が

「最初は少年2人がチンピラ3人に絡まれていたように見えたのに、横を通り過ぎると『ギャー』と声がしたので振り向くと、チンピラ

2人が倒れていて少年らが走っていくのを見ました」と身振り手振りを混せて答えた。さらに「家の主人の弟のお嫁さんの兄が少年課の刑事なんですよ」などと話が脱線していった。

嫁の話を若い刑事が担当しているうちにおっさんの刑事に話かけられた。

ただ、不自然な発言だけしないように・・・心臓の鼓動がすこし速くなった。

「殴り合いとかは見ませんでしたか」

「私は見ていませんね」

「少年たちの声とかもききませんでしたか」

「聞いていません」

逃げた少年の服装や見た目などを聞いてこないと言うことは、少年はすでに保護されている可能性が高いな　と思いながらチンピラがどうなったかすごく気になった。

聞くとか怪しまれるか？いや怪しまれても大丈夫、証拠はない。

「あおう、倒れていた人たちの怪我はどうですか？」

刑事が言う

「死亡しました」

一瞬目の前が真っ白になる、考えるよりも先に言葉がでる。

「どっちが」

「どっち？どちらと言いますと」刑事は鋭い目で質問してきた。

「二人倒れていたように見えたものですから、お二人共ですか？」

「いえ、青いシャツを着ていた方ですね」

「そうですか」さっきのはまずかった、もう下手な質問はやめよう。

怪しいと思われたのか連絡先を聞かれて、その場を立ち去った。

帰りの車の中は先ほどの事件の話で嫁が興奮して話している。

それを聞きながら考えていた。私はたった今殺人者になった。しかしそれほど動揺はない。

自分が超能力者だからだろうか。それとも絶対に証拠はないし、逮

捕するには超能力の存在を証明しなければならないこと。それは無理だろうと言う安心感からか。
しかし、あの少年たちが殺人犯にはならないかそれがすこし心配だった。

翌日、朝テレビを付けるとニュースで

昨日、茨城県水戸市郊外的大型ショッピングセンターの駐車場で殺人事件が発生しました。被害にあったのは同市に住んでいる無職、大谷タケシさん（32歳）

被害にあった大谷さんは仲間と歩いていると少年2人に肩がぶつかったと口論になり、少年達に金品等を要求していたところ、何者かが前方より投げた石が大谷の頭部にあたりました。その後、病院に運ばれましたが、脳挫傷により死亡が確認されました。

そのニュースを内心穏やかでない状態で見ながら会社に向かうことにした。

仕事が終わりに帰ってくると、嫁がまた興奮気味に話してくる。

「ねえニュース見た」

「ネットで見だよ」

「怖いわね 犯人は何を考えているのかしら。もし外れて私達とかに当たったらどうするつもりだったのかしらね」

「コントロールに自信があっただよ」

「でも20m以上離れていたんでしょ？しかもテレビで検証したら衝撃から時速160km以上で投げたらしいよ」

「へーそうなんだ」

まーそうなるわけか。目撃者の証言などから、犯人が見当たらなかった。つまり隠れられる場所と被害者までの距離が最低でも20m離れていたわけだ。

でも私は目の前で投げている。

大リーガーの投手ならできそうな事件になってしまったわけか

事件から翌周の日曜日、嫁と子供たちは買い物に行っている。

日曜日の昼間何もやることがないので、家でごろごろしていた。

「ピンポン」家のチャイムが鳴る。

「はい」インターフォン越しに答える

「すみません。先月の大型ショッピングセンターでの事件でお話をお聞きしたいのですが？」

「どちら様ですか？」インターフォン越しに見た感じでは刑事で無さそうだ。

「フリーライターをしている高橋と申します」

「はあ、少々お待ちください。」

家に入れるのは何となく嫌なので外で話をすることにした。

外に出てみると、ひよろつとしたやせ気味の背の高い男が立っていた。

「フリーライターをしている高橋と申します」

名刺を差し出し、また高橋と名乗る男は話しを始めた。

「先月の大型ショッピングセンターでの事件を目撃されましたよね」

「近くには居ましたが見てはいません」

「そうですか・・・単刀直入にこの事件の犯人はどんな人物だと思います。」

「テレビでやってましたよ、大リーグ級の投手じゃないんですか？」ふざけて答えた。

「私は、超能力者が犯人だと思っています。」

「超能力者？ははッ。石を超能力で飛ばしたとか？」なんとなく言ってみたが少し焦った顔をしてしまったかもしれない。

「違います。」

「ハイ？」

「瞬間移動みたいな能力ではないかと思っています。」

「はー？あははははっ」

「いや、まじめです。この水戸市や隣のひたちなか市のコンビニ等で窃盗が立て続けに起こったんです。金額は少ないのですが一回数万円ぐらい、いつの間にかレジからお金がなくなる事件が20数件ほど」

「バイトの子が盗ったとか？」

「それはないです。防犯カメラにもそのような映像は残っていませんでした。ただしその時間帯に20数件ほとんどのお店の防犯カメラである男が映っていました。」

私は一瞬で理解した。前の所有者だ。そして何らかの原因で死亡した。

「その男は見つかったのですか？」

「はい、見つかったのですが交通事故で死亡しました」

「そうですか、でもなぜ私にそこまで話すのですか？」

「交通事故があつたのが那珂市後台のコンビニの近くです。」

「那珂市後台のコンビニ？」

「国道349号線沿いのコンビニですよ」

「あー、私が朝立ち寄るコンビニですね」自分の心臓の鼓動が速くなるのが分かった。

「はい、そうです。この男に見覚えありませんか」

写真を見せられたが、案の定初めて見る顔だった。

「初めて見ます」

「そうですか。山崎和夫さんと言います。住まいはひたちなか市のアパートで水戸市の居酒屋でバイトをしていたそうです。とても金回りが良かったそうです。居酒屋のバイトだけでは考えられないんですよ」

「その写真の人が犯人ですか？」

「さーそれはわかりません。すでに亡くなっているので、ありがとうございました。」

といい、フリーライターの高橋は向きを変えて歩いていった。が突然振り返り

「そうそう、石神さん」

高橋は話を続ける。

「山崎さんの所持品からいつも肌身離さず持っていたものがなくなっていたそうです。何でも友人には金を生む大切なお守りだと。その友人が話すにはストップウォッチにしか見えなかったそうですが？」

ドキツとした。「はあ」と答えたが、頭が真っ白になった。こいつは間違いなくこのストップウォッチのことを知っている。

高橋は私の顔を見てニヤッと笑ったように見えた。

くるっと私に背を向けてゆっくりと歩きながら高橋は帰って行った。家の中に入りソファーに寝転がると、渡された名刺を見ながら考えていた。

高橋を殺すか？いや、おそらく取材した人物などの記録は付けているだろうし。それを奪ってからでも遅くはない。物証は無いはずだ。少し様子をみるか。

とりあえず嫁にはストップウォッチのことは誰にも言わないように口止めするか？

それも不自然か・・・いつそのこと、高橋にストップウォッチを見せるか？

いやそれはまずい。裏には取説が書いてある。取説を見せるわけにはいかない。

指紋は今のうちにふき取っておこう。山崎（前の所有者）の指紋が出ると厄介だ。

あと、考えられるのは・・・

ガチャと玄関が開く音がした。

「ただいまー」嫁が大きな袋をさげて帰ってきた、その横を娘が走りながら

「ただいまーパパ」

「お帰り」

駆け寄ってくる下の娘を抱き上げると、その拍子にストップウォッ

チがポケットから落ちた。

「あっ」と言った瞬間、上の娘がストップウォッチを拾い右のボタンを押してしまった。

「ピッ」

その瞬間 自分の周りの雑音が消えた。

動かない娘の手からストップウォッチを取り上げた。

ストップウォッチのボタンを押す

「ピッ」

また、時は動き出す。

娘は手に持っていた物がなくなったので首をかしげている。

「何を買ってきたの？」と娘に話しかける。

「ひみつ」娘が言う

「あっそうですか。別にママに聞くからいいよ。」

「聞きたい？教えてあげようか？」

「じゃ、教えて」

「かわいい洋服」にこにこしながら娘が言う。

この時間が幸せだと思いながら・・・もう一方で別のことを考えていた。ストップウォッチの取り扱いは気をつけなければならない、ただ今回、収穫もあった。自分以外の人間がボタンを押しても時が止まるのは所有者だけ。

ん、待てよ。取説の3行目、

『最後に時間を止めた人が死亡した場合、現在の所有者の所有権は放棄されます』

もしかして、このストップウォッチを他の人（所有者以外）が押してから、押した人が死ねば・・・

私の所有権は放棄される・・・そうとも取れる内容だ。ただ簡単に確認はできないな。

数日が経ち、仕事が終わりに帰ると

「ただいま」

「お帰りなさい。そうそう今日、高橋さんって言う記者さんが見えになったのよ」

「あー例のショッピングセンターの事件の件だろ」

「ちがうよ、コンビニ窃盗の件なんだって」

そっちで来たか

「へーそれで」

「何でもあなたが毎朝立ち寄るコンビニの近くで、交通事故で亡くなった人が犯人じゃないかって言ってるわよ」

「ふーん、それで」

「あなたが大事にしている様な黒いストップウォッチを持っていたそうよ」

「あーこれね、前回来た時も同じことを聞かれたよ」

「あらそう。それを見せてほしいんだって」嫁がストップウォッチを指さす

「別にかまわないけど、あと何か聞かれた？」

「どこで手に入れたとか、いつから持っているのかとかそんなこと」

「そうなんだ。あいつなんか胡散臭そうだから気をつけるよ」

「はい、ご飯出来てるわよ。」

「ありがとう、今日は何？」

「あなたの大好きなハンバーグ」

「それは楽しみだ」

食事をしながら、高橋のことを考えていた。

あいつはどこまで知っている？俺がストップウォッチを持っている事は前回話したか？いや話していないはずだ。

どうせ探りに来ているだけだ。しかし俺がストップウォッチ持っているのはわかったわけだ。

あいつなら次はどう出る。いつから持っているのか聞いてきた時点

で、コンビニの窃盗犯とこのストップウォッチが同じものだと思うはずだ。

そもそもあいつは何がしたい？この能力がほしいのか？それとも・

考えているうちに一つの疑問が生まれた。

そもそもこのストップウォッチは ほかにあるのだろうか？・・・

一週間ほどが過ぎ、夕食を食べていると突然

「ピピピピピピピピピピピ」

携帯が鳴った。

誰だろう？初めて見る番号だ。食事中なので席をはずして電話にでた。

「ハイ、石神です」

「こんばんは、高橋です」

「おい、何で俺の携帯番号を知っているんだ」思わず大きな声を出してしまった。

「先日、教えて頂きませんでしたか？」

「教えてないはずだが」

「そうでしたか？なぜで知っているんでしょうね。あつ、そうそう知っていますか？東京で面白い事件が発生してるんですよ。例の超能力者だと思われる」

「東京で？」

「そうですね。明日取材に行こうと思っています。」

「そうですか、がんばってください。」

ピッ 携帯電話を切った。

このストップウォッチは2個あるのか・・・それともハツタリか？もし、2個あるならば時間が止まった空間は共有できない・・・

今は動かない方がいい。

追う者

追う者

お世辞にもきれいとは言えない8畳の部屋で目が覚めた。

時間は・・・腹が減っている・・・お昼ぐらいか？

とりあえずパソコンの電源を入れる。

俺は今フリーターと言うやつだ。少ない貯金とバイトで生計を立てている。

それでも昔は東京で新聞記者をしていた。あの事件がきっかけで、実家に逃げるように帰ってきた。もうあれから3年か・・・

今は生きる意味が見いだせないでいた。

腹が減った。コンビニに弁当でも買いに行くか？

今は実家に住みついている。両親とも健在で、元氣すぎて顔を合わせるたびに小言を言われるので喧嘩になるくらいだ。

実家はコンビニが近かった。俺が東京から実家に戻ってきた時には建っていた。もちろん俺が地元の高校に通うころはなかったのに、高校生の時にあれば便利だったのに。と最近思ったりもする。

近くのコンビニに着いたがいつもと様子が違う。

パトカーが一台コンビニの前に止まっていた。

「警察？」

制服を着た警察官が店長と話をしている。

顔見知りのバイトの子がいるので話しかけてみた。

「よっ、何かあったの？」

「あッ、こんにちは」

「警察来てるけど、強盗でもあった？」

「いえ、レジの中のお金が消えたんです」

「消えた？」

「そうなんですよ。しかも、店長は私を疑っているんですよ。しんじられない。」

「で、あんたが盗ったの？」

「とつてませんよ」

「詳しく教えて」

「もう上がる時間なのでレジの中を確認していたら、1万円札だけなくなっていたんです。店長も横にいたのに 盗るなんてできるわけがありません。」

「へー、お金が消えた？」俺はニヤリと笑った。

何も買えそうにないので何も買わずに家に帰った。カップラーメンでも食べるか。

実家に着くとまず台所でお湯を沸かした。

部屋中 物で埋まっている足の置場もない自分部屋に戻ると、お湯が沸くまでパソコンの前に座りパソコンのキーボードをたたき始めた。過去の資料を印刷する。

お湯が沸いたので台所に行きカップにお湯を注ぐ。それを持って自分の部屋に持っていく。

プリンターが一所懸命に動いている。

カップラーメンを食べながら近くのコンビニやスーパーを検索し地図もプリンターで出力した。

一通り印刷した資料を鞆につめて部屋を出た。
ふるそうな原付バイクにまたがり真新しいヘルメットをかぶり実家を後にした。

先ほどの警察の来ていたコンビニから少し離れたコンビニについた。

ひとりの店員に声をかけた。

「すいませーん。店長さんいますか？」

「はい、．．今日は夕方には来るはずです。」

「そうですか。ありがとうございます。そうそう」

名刺を渡す。

「フリーライター　高橋・さん」店員は不安げな顔で見つめてくる。

「そうそう、最近このコンビニで窃盗事件とかありませんでした？たとえばお金が消えているとか」

「はい、先日レジからお金がなくなっただって騒いでいました。」

「ありがとうございます。」高橋はニヤリと笑った。

あの時と同じだ。不可能な犯行。犯人はおそらく超能力者だ。それしか考えられない。物体を瞬間で移動させることができる能力。今度こそ奴を捕まえてやる。

――過去にさかのぼる――

俺は東京の大学を卒業後、東京の地方紙の新聞社、東東新聞社に就職した。

それから4年ほど過ぎたある日、不可解な窃盗事件を取材することになった。

コンビニやスーパーのレジから突然お金がなくなる事件である。

ある範囲に集中して50件近く。

中にはバイトの子が疑われて警察に突き出されるケースもあった。

俺はほとんどの店の防犯カメラを見せてもらった。レジ近くで不審な人物は見当たらなかった。が、見せてもらっているうちにほとんどの防犯カメラに写っている男を発見した。

偶然の一致だろうか？いや、ちがう。俺もそうだが、だいたい決ま

った店に行くはずだ。

近くにあるとは言っても、こうもいろんな店に行くのはどう考えても不自然だ。

その男の名前と現在住んでいる住所を突き止めた。梅沢と名乗っているらしい。本名かどうかはわからないが。アパートも窃盗事件があったお店の範囲に入っていた。

仕事も定職にもつかず遊んでいるらしいが、金には困ってはいないらしい。

簡単に調べた結果、毎月きちんと家賃も納めているし、借金等も無いみたいだった。

ちょうど梅沢のアパートを訪ねると、上下黒のトレーナー姿の梅沢がアパートから出てきた。

話しかけるか迷ったが、梅沢を尾行することにした。なぜか地下鉄に乗り少し離れたコンビニに入って行った。

コンビニの中で様子を探っていると、週刊誌を立ち読みしているだけだった。

立ち読みが終わるとペットボトルのお茶とお弁当を持ちレジに向かった。不自然な行動は今のところ見られなかった。

右手をポケットにずっと入れていたこと以外は。

店を出たので、引き続き尾行すると梅沢は突然右手をあげてタクシーを止め乗り込んだ。

行きは地下鉄で帰りはタクシー？不自然な行動だった。

もしかして・・・

タクシーのナンバーを控え、あわてて先ほどのコンビニに引き返す。ちょうどカウンターの中には店長と書かれたプレートを付けている人がいた。

名刺を渡し事情を話す。レジを確認してもらった。1万円札が6枚なくなっていた。

この窃盗事件を担当している知り合いの刑事に電話をした。

「沢田さん、東東新聞の高橋です」

「あー高橋さん、どうしました？」

「例の窃盗事件の犯人が分かったんです。」

「本当ですか？」

「はい、名前は梅沢と名乗っています。詳しくは後でお話しますが、今コンビニから盗んだ金を持っているんです。コンビニの定員の指紋が梅沢の持っている一万円札から出れば証拠になりませんか？」

「そうですね、こちらでも検討してみます」

「よろしくお願いします。私はこれから梅沢に会ってみます。もし犯人なら説得して出頭させるか、とにかく梅沢を連れて署の方に向かいます。」

「無理はしないでくださいね。」

「はい、ではまた連絡します。」

急いでタクシーを捕まえて梅沢のアパートに向かった。

梅沢の部屋の前まで来ると少し緊張しながらベルを鳴らす。

「すいません。東東新聞社の高橋と申します。」

ガチャ、梅沢が出てきた。

「新聞はとらないよ！」梅沢は新聞の勧誘か何かと思ったのだろう。

「ある窃盗事件取材しております」名刺を渡した。

「窃盗事件？俺に何か関係あるの？」梅沢はおもしろくなさそうに答えた。

「いえ、梅沢さんが犯人を目撃している可能性が高いものですから」「はー？」

「コンビニやスーパーのレジから現金がなくなる窃盗事件が発生しています、防犯カメラを確認してみるとそのほとんどのカメラに梅沢さんのお姿が映っていました。」

「それで俺が犯人だともいうのか」と梅沢は怒った口調で言う

「いやそう言う訳ではないのですが、犯人を目撃している可能性が高いと思ひまして、お手数ですが警察まで一緒に行っていただけま

せんか？」

もしこのまま警察で梅沢の持っている1万円札を調べてもらえば先ほどのコンビニの店員の指紋が出るはずだ。物証になる。

梅沢は少し考えてから思ったより素直に

「わかりました。いいですよ。少し待ってください、着替えますから」と言い梅沢は着替えに部屋に戻った。

以外に素直だな？犯人はこいつじゃないのか？

「お待たせしました。じゃ行きますか」

「ハイ、お願いします。担当の刑事さんが目黒署にいます。そこまでよろしいですか」

と言うと、梅沢は

「じゃ、車を拾うのに大通りまで出ましょう。」と言い歩きだしたのでついていくことにした。

大通りに出て少し歩いたところで・・・突然、俺の目の前に一台の車が猛スピードで向かってくるのが見えた。「キキー」と大きなブレーキの音と共に・・・俺の体に走った鈍い衝撃とともに意識がなくなった。

気がつくと、そこは病院のベットで寝ていた。体中激痛が走る。周りを見回すと久々に見る両親の顔がそこにあった。

あとから聞いた話だが、俺が道路の真ん中を歩いていたそうだ。

俺は理解した。梅沢 が瞬間移動で俺を車の前に飛ばしたのだと。

運よく一命はとりとめたが、3か月入院しリハビリに6か月の期間を要した。

その後、梅沢を捜したが見つからなかった。なんとも言えない敗北感と脱力間で会社を辞め実家に戻た。

もうあれから3年か・・・梅沢を今度こそ追い詰めてやる。

印刷した地図のコンビニを一軒一軒回っていく。何度もお願いして防犯カメラを見せてもらった。2週間、根気よく調査を進めていると、梅沢はいなかったが新たに別の男がほとんどの店で確認できた。こいつが犯人だ。

山崎和夫（38歳）。住まいはひたちなかの市のアパート 水戸市の居酒屋でバイトをして生計をたてている。夜な夜な友人らと派手に飲み歩いているらしい。居酒屋のバイトだけでは考えられない。友人たちに話を聞いた結果、金に困らないお守りを肌身離さず持っているらしい。

お守りの形はまるでストップウォッチの様だったと、証言を得た。

どうやって接触をする。まともに行けば今度こそ殺されかねない。

すこしの間 尾行をして奴の行動を把握するか。・・

その日の山崎の行動は夕方から21時ぐらいまで居酒屋でバイトをして、そのあとは飲み屋やキャバクラ、バーなどを何軒も梯子しながら飲み歩いていた。

もう周りは明るくなってきた。朝の6時30分だった。

ようやくタクシーに乗って帰るようだ。

タクシーを原付で追いかける。しばらく走るとコンビニの前でタクシーを降り、コンビニに入って行った。

山崎はコンビニで買い物をしたらしくビニール袋を持って出てきた。朝の通勤で交通量の多い道路をいきなり渡り始めた。

その時、「キーーーーー」とブレーキ音と共に山崎は車にはねられた。

俺はその光景を呆然とみていた。

車が、かなりスピードで行き交う道路を、まるで車を無視するように道路を横断していった。酔っぱらっていたからか？
はねられる瞬間ポケットの中を探していた。まるで財布をどこかで落としたかのように。

山崎は死亡した。司法解剖で多量の飲酒が裏付けられ、酔っぱらいの飛び出しということになった。

目の前で起きた、山崎の死についていくつかの疑問が生まれてくる。一連の窃盗事件が山崎の犯行ならなぜ、瞬間移動しなかったのか？
または、何らかの理由でできなかったのか？

お金や他人（俺）は瞬間移動をすることはできるのだが、自分自身はできないのか？

それならば向かってくる車を瞬間移動すればよいはずだ？

もうひとつ気になることがあった。死亡した山崎は交通事故後の持ち物に、例のお守りはなかったのである。

そこで一つの答えが見えてきた。例のお守りが瞬間移動に必要ではないか・・・と。

ここ最近例の窃盗事件は起きていない。

やはり山崎が犯人だったのだ。山崎が死亡したので犯行はおきない。つまり窃盗事件は永久に起きないと言うことか・・・

なんとなく張り合いが無くなった感じた。また元の生活の戻るのがまた、あとちょっと言うところで犯人を捕まえられなかったことで前にも味わった脱力感と敗北感が全身を覆った。

山崎が死亡して、また生きる意味がわからないまま、だらだらと生活を送っていた。

2週間ほどたったある日、何気なくリモコンでテレビを付けた。

昨日、茨城県水戸市郊外的大型ショッピングセンターの駐車場で殺人事件が発生しました。被害にあったのは同市に住んでいる無職、大谷タケシさん（32歳）

被害にあった大谷さんは仲間と歩いていると少年2人に肩がぶつかったと口論になり、少年達に金品等を要求していたところ、何者かが前方より投げた石が大谷の頭部に直撃しました。その後、病院に運ばれましたが、脳挫傷により死亡が確認されました。

アナウンサーが事件のあった場所の簡略化したパネルを持って説明をしている。

ここで少年たち2人と被害にあった大谷さんたち3人がいた場所です。

ここから少し離れたこの場所で口論しているのを目撃している人が複数いますが、石を投げた犯人の目撃はありません。

そして、目撃者たちからの死角になるのがこの場所だけです。

殺害された大谷さんから死角になるこの場所まで20m以上も離れています。

そこから野球ボール位の石を投げたことになります。

司法解剖の結果なんと投げた石は初速160km/hはでていたのではないかとの見解です。

テレビを見ていて高橋はニヤリと笑った。

この犯人は窃盗犯と同じ能力者だ。つまり投げた石を瞬間移動させたのだ。

今度は殺人者か……

平日の昼間だが大型ショッピングセンターともなると大勢の人でに

ぎわっていた。

事件のあった現場をウロウロしていると、ガタイの良いおっさんと中肉中背の比較的若い青年に声をかけられた。

「すいません」

すぐに分かった。刑事だ。名刺を渡して挨拶をする。

「フリーライターの高橋と申します」

「フリーライターの方ですか？われわれはこう言う者です」

警察手帳を見せてもらった。相手がしゃべろうとする前に

「事件取材しようと思ひまして、変な事件ですね。そうまるで・

」

「ほー、まるでなんだね」ガタイの良い刑事に言われた。

「超能力を使つたみたいな」

「ふん、ゴシップ誌かなにか？」若い刑事が言う

やはり警察ではそういう発想はできないわけだ、いや大きな組織では無理だろう。

「それじゃ失礼します。」立ち去ろうとすると

「高橋さん、この方たちが今回の事件の目撃者なんだが」

ガタイの良い刑事に数人の名前等の書いてあるメモを渡された。

「どうしてこれを」

「何かわかったら教えてくれ、ギブ アンド テイクだ」

「ありがとうございます」

そう言つてその場を立ち去つた。何やら若い刑事がガタイの良い刑事に詰め寄つてるようにみえたが俺の知つたことではない。

裏があるのかもしれないが、このメモはありがたかつた。

次の手が見えない状況だつたからだ。

何人かに話を聞いたが面白い話は聞けなかつた。

最後の一人だが、通勤で毎朝通る道路が、山崎が車にはねられて死亡した道路だつた。

若いのに、この辺で一軒家を構えるなんて大したものだ。

「ピンポン」家のチャイムを押す。

「はい」インターフォン越しに男性の声が聞こえる。

「すいません。先月の大型ショッピングセンターでの事件でお話をお聞きしたいのですが？」

「どちら様ですか？」

「フリーライターをしている高橋と申します」

「はあ、少々お待ちください。」

ガチャとドアが開き、少し背の低い真面目そうな青年が出てきた。年は同じぐらいか？

「フリーライターをしている高橋と申します」

名刺を渡し、話し始めた。

「先月の大型ショッピングセンターでの事件を目撃されましたよね」

「近くには居ましたが見てはいません」

「そうですか・・・この事件の犯人はどんな人物だと思います。」

「テレビでやってましたよ、大リーグ級の投手じゃないんですか？」

「私は、超能力者が犯人だと思っています。」

「超能力者？ははッ。石を超能力で飛ばしたとか？」

「違います。」

「ハイ？」

「瞬間移動みたいな能力ではないかと思っています。」

一瞬の表情を見逃さなかった。

「はー？あははははッ」

「いや、まじめです。この水戸市や隣のひたちなか市のコンビニ等で窃盗が立て続けに起こっていたんです。金額は少ないのですが数万円ぐらい、いつの間にかレジからお金がなくなる事件が20件ほど」

「バイトの子が盗ったとか？」

「それはないです。防犯カメラにもそのような映像は残っていませんでした。ただしその時間帯に20件中ほとんどのお店の防犯カメ

ラである男が映っていました。」

「その男は見つかったのですか？」

「はい、見つかったのですが交通事故で死亡しました」

「そうですか、でもなぜ私にそこまで話すのですか？」

「交通事故があったのがひたちなか市後台のコンビニの近くなんです。」

「那珂市後台のコンビニ？」

「確か通勤でコンビニの近くを通るはずだが・・・」

「国道349号線沿いのコンビニですよ」

「あー、私が朝立ち寄るコンビニですね」

あのコンビニに立ち寄っていたのか。

「はい、そうです。この方に見覚えありませんか」

山崎の写真を見せた。

「初めて見ます」

山崎のことは知らないみたいだ。

「そうですか。山崎和夫さんと言います。住まいはひたちなか市のアパートで水戸市の居酒屋でバイトをしていたそうです。とても金回りが良かったそうです。居酒屋のバイトだけでは考えられないんですよ」

「その写真の人が犯人ですか？」

「さーそれはわかりません。すでに亡くなっているので、ありがとうございます。」

そう言っただけは向きを変えて歩いていった。

何かが引かなかった。窃盗事件の何かを知っているような……まるで事件の犯行方法を知っているような……。

ある質問をぶつけることを思いついた。振り返りもう一度話始めた。
「そうそう、石神さん」

驚いたような顔でこちらを見ている。

「山崎さんの所持品からいつも肌身離さず持っていたものがなくなっていたそうです。何でも友人には金を生む大切なお守りだと。そ

の友人が話すにはストップウォッチにしか見えなかったそうですが
「？」

「はあ」

俺は石神が一瞬動揺したのを見逃さなかった。ストップウォッチと
言う言葉の時に

石神さんにお礼を言い帰ることにした。

追う者2

追う者2

石神の周辺を調べてみた。

話を聞いても悪い噂は出てこない。

近所の評判も良い。近所付き合い、挨拶などもきちんとする。

会社ではあまり目立つ方ではないが仕事はできる。しかも真面目だ。休日は娘たちと一緒にいるのをよく見かけるそうだ。

金持ちではないが平均並みな生活を送っているようだ。

石神の妻にも話を聞いたが、夫婦関係も悪くない印象だ。

考えられるのは絡まれている少年を見るに見かねて、チンピラを殺したか？

そもそも殺すつもりはなかったのかもしれない。

たまたま一人死亡した。そう考えた方がしっくりくる。

石神の妻の話では、石神がストップウォッチを持つようになったのが、先月の中旬ごろと言っていた、山崎の死亡時期と重なる。

コンビ二で山崎が落としたものを石神が拾った。それは間違いないと思うが……

つけっぱなしのテレビのニュースに耳を傾けた。

昨日お昼頃、東京都 新宿区の路上で 山田会系 暴力団 一八会

組長 中山 康太郎 さん（48歳） が 家を出たところ、飛んできた包丁が首にささり、病院に運ばれましたが出血性ショックにより死亡が確認されました。

俺は急いで石神のアリバイを調べてみた。昨日はちゃんと会社に出勤している。

そもそも瞬間移動できるのならアリバイは意味がないか？
とうとう動き出した。正義の味方にでもなるつもりか。

明日は東京に行くか？その前に石神に探りを入れてみるか？

石神の携帯の番号は調べてわかっていた。

「ハイ、石神です」

「こんばんは、高橋です」

「おい、何で俺の携帯番号を知っているんだ」

かなり怒っている様子だ

「先日、教えて頂きませんでしたか？」 とぼけてみた。

「教えてないはずだが」

「そうでしたか？なぜ知っているんでしょうね。あつ、そうそう知っていますか？東京で面白い事件が発生してるんですよ。例の超能力者だと思われる」

「東京で？」

「そうなんですよ。明日取材に行こうと思っています。」

「そうですか、がんばってください。」

ツーツーツー 急に携帯電話を切られた。

翌日電車で東京に向かい知り合いの編集者がいる出版社の前に着いた。

村沢と言う記者を呼び出してもらった。

「村さん 久しぶり」

「高橋、久しぶりだな。田舎に帰ったんじゃないのか？」

「今日出てきた。」

「俺になんの用だ？」

「先日の組長が殺害された事件を取材してるの誰」

「俺だよ」

「やっぱりね。協力できるかもしれないぜ」

「犯人の目星でも付いているのか？」

「ただでは教えられない。」

「わかったよ、上司に掛け合ってくるよ。ちょっと待ってる」

「ありがとう」

5分ほどまっていたら村沢が走ってきた。俺の記者時代の知り合いだ。たまたま年が同じだったので気があった。

「あまり金にはならんかもしれんぞ」

「かまわない。」

「よほど因縁があるみたいだな、高橋」

「ああっ」力なく返事をした。

「早速、取材に行きますか」

移動中電車の中で俺は今までのいきさつを村沢に話した。

「ちよつと待て、それで犯人は逮捕できるのか？」

「だから記事に書くんだろ。」

「そうだな。でも今回は包丁だ。確実に相手を殺す気だ。」

「そうだ、ただの殺人鬼だ」

警察の発表によると包丁は量販店で販売されていて関東地区の多くの店舗で扱われているものだった。凶器から犯人の特定は難しい。

凶器に指紋等は付いていなかった。

警察は暴力団同士の抗争とみている。

対立している組を今あたっているところだそうだ。

2日が過ぎ、村沢と昼飯を食べていると、新たな事件の情報が入ってきた。

『臨時ニュースです。』

自由民主党の選挙対策委員長の 古閑 武 議員が演説中に突然飛んできた包丁が胸部にささり重症を負った模様です。急いで病院に運ばれましたが、現在重症と言うこと以外の情報は入っていません。

警察は傷害事件として犯人の行方を追っています。』

「政治家まで殺すのか？」村沢は少しおびえて言った。

「政治家もヤクザも一緒なんだろう。要は正義の味方になりたいただの殺人鬼さ」

「俺たちでは手に負えない気がするんだ。このままじゃ記事にできないし。この資料、知り合いの刑事に渡してもいいか？」

「ああ、いいよ。俺は俺なりに調べてみるよ。また報告する。」

村沢とは別れてひとりで調査をすることにした。

中山組長の事件をまず調べようとしたが、極端に目撃者が少なかった。

そこで、古閑議員の事件を先に調べることにした。

演説中と言うこともあり倒れた瞬間の目撃者はたくさん得られたが、投げた犯人の目撃者はいなかった。やはりこの事件は超能力者の犯行だ。つまり石神の犯行だ。

そこで、石神の写真を見せて話を聞いて回ったが、当日石神見た者はあられなかった。

事件当日の石神の行動を調査したが、不審な行動は見当たらなかった。

証拠が見つけれないまま、次の日曜日が来た。中山組長が殺されて丁度一週間後だった。

おそらく同一犯と思われる殺人事件が起きてしまった。

『今日のお昼頃、東京都 港区の路上で 暴力団組長 太田 昭宏

さん（59歳）が 事務所に入ろうとした時、いきなり首から血が噴き出しました。病院に運ばれましたが出血性ショックにより死亡が確認されました。首には鋭利な刃物で切られた傷があります。凶器は見つかっていません』

事件当日の石神の行動を調査したが、不審な行動は見当たらなかった。

また、石神の写真を持つて、太田組長が殺害された付近の聞き込みをしていた。

「あのーすいません。私、フリージャーナリストの高橋と言います。先日・・・」

言葉に詰まってしまった。その女性は見覚えのある顔だった。

「高橋君じゃないの」

「あつ川口先輩。・・・相変わらずお綺麗ですね」

「なに社交辞令みたいなこと言ってるのよ」川口は名刺を見ながら「ジャーナリスト？実家に戻ったって聞いていたけど」

「ハイ先日出てきまして、例の連続殺人事件を調べているんです」

川口は東東新聞時代の先輩であり政治部の記者をしている。当時、部署は違ったが、俺をかわいがってくれていた先輩の友人と言うこともあり、何度かお酒を飲んだことがある程度の知り合いだった。

「へー」あまり話題がなかったので

「すいません。この人を見たことはありませんか？」と石神の写真を見せた。

川口は写真をみて

「たぶん会ったことはないわね。誰なの」

「おそらく連側殺人事件に関係しているはずなんです」とてもびつくりした様子で

「この事件に関係が、ねー詳しく教えてくれない。絶対に他言しないから」

「わかりました」

外で立ち話も何なので喫茶店に入り、今までの状況を説明した。

川口は一通り説明を聞きいたあと、今まで調べた資料を見ていたが、資料の途中で突然

「がんばってね、こちらでも情報が入ったら教えるから」

と言って、連絡先の入った名刺を渡して、急いだ様子で去っていった。

その日、付近の聞き込みをしたが、石神を見た者はいなかった。

数日が過ぎ、今度は自由民政党の井吹議員が首を何者かに切られて殺害された。これで4人目だ。

4人目の事件の翌日、井吹議員が殺害された付近の聞き込みをしていると

「ピピピピピピピピピ」¹と携帯が鳴り出した。

携帯を見るとなんと石神からだった。少し恐怖を感じたが出ることにした。

「もしもし、お久しぶりです石神さん」

「高橋さんは今、東京ですか？」

「朝から晩までこちらで調査をしています」

「いい加減、殺人事件が起こるたびに私の周りで聞き込みするの、やめてもらえませんか。職場の周りの人から変な眼で見られています。」

「すべて話して頂けると、こちらでも聞き込みしなくてもすむのですが」

「高橋さん、あなたは勘違いをしていますよ。」

「そうでしょうか？私はあなたが犯人だと思っています。」

「今回の連続殺人犯、誰が犯人か教えてあげましょうか？」

「なに！」

「最近、あなたの資料等を見た女性が犯人です」

「なぜ、それを」

「では、取材がなばってください」

「ツイッター」

「どう言うことだ？最近、資料を見せた女性？」

「川口先輩が・・・まさか・・・石神の陽動作戦か？」

「今までの俺の仮説が覆ることになる。」

『能力者は一人ではない』

頭の中が混乱している。

「ふー」と息を吐いてから、事件を整理してみることにした。

6月22日（日） 中山組長殺害 包丁で殺害

6月24日（火） 古閑議員殺害 包丁で殺害

6月29日（日） 太田組長殺害 首を切って殺害

7月 3日（木） 井吹議員殺害 首を切って殺害

日曜日に組長が殺され、平日議員が殺されている。

しかも、日曜日の組長と同じ殺害方法でその週に議員が殺害されている。

「・・・」

もしかして組長は実験台・・・本命は議員・・・

川口の名刺を取り出した・・・政治部・・・

つまり殺害された両議員とも演説をしていたわけだから取材に行ってもおかしくない。

動機は……前に酔った時にあの政治家の利権がどうのこうの言っていたような……あの時は興味がなかったので聞き流して覚えていないが……それが動機……

翌日、川口の写真を持って太田組長の殺害事件があった付近の聞き込みをした。

ちょうど事件のあった場所の道を挟んで反対側の喫茶店に彼女が来ていたと言う証言を得た。はつきりとした時間はわからないがパトカーや救急車などが来て騒がしくなる前までお店にいたと言うことだ。

それから数日後 7月9日

今日は自由民主党の 志村 信高 元官房長官らの演説のある日だった。

会場は物々しい雰囲気にもまれていた。

会場に入るのには金属探知器みたいなもので身体検査を行われ、やつの思いで会場に入ることができた。

記者の集まる席の中から彼女を捜した。彼女は前の方に陣取っていた。

壇上の周りにはSPらしき人がたくさん居るのが素人目にもわかるほど警備は厳重だ。

志村議員のスピーチが始まってから、特に彼女を注意深く観察した。彼女は鞆から黒い物体を取り出し何かを確認してからそれをポケットにしまった。

その後、数秒して、会場は騒然とした。おそろおそろ壇上の方を見た。

壇上の横に置いてあった国旗の竿の先端の尖った部分で胸を貫かれた志村議員の姿があった。なんとも言えない無残な光景だった。

会場を出るには、警察の取り調べ等を受けてからしか会場を出られないようなので、待ち時間の間に先ほどの彼女の行動を思い起こし考えることにした。

鞆から取り出した黒い物・・・ストップウォッチ・・・

確か梅沢も窃盗の時に片方の手をポケットに入れていた。

山崎も交通事故にあう前にポケットの中を探していた。

今回、彼女もストップウォッチを確認してからポケットに入れて何かをした。

残っている会場の人に状況を聞いてみると、国旗が一瞬消えて、次の瞬間、志村議員に突き刺さった。とのことである。

結局、会場から出るのに3時間もかかった。

丸一日、悩んだ。

彼女に真相を確認するかどうか？場合によっては殺される可能性がある。

殺される恐怖に押しつぶされそうになる。しかし、逃げるわけにはいかない、いいや、逃がすわけにはいかない。もうあの脱力感、敗

北感を味わいたくはなかった。

殺される覚悟で彼女に会うことを決心した。

直接電話をして明後日、日曜日のお昼に会う約束をした。もちろん内容は伏せてある。

雑誌記者の村沢の力を借りて、彼女との会話の内容を、携帯電話を通して録音してもらうことにした。俺が万が一殺されてた場合は村沢が警察にそのデータを持ち込む手はずになっている。

いよいよ日曜日の朝が来た、昨夜は一睡もできなかった。一度、村沢のいる出版社に立ち寄って、会話を録音するマイクのテストなどを行ってから彼女に会う予定だ。

まずはビジネスホテルから出版社に向かうために、歩いて最寄りの駅まで向かった。ホームで電車を待ちながら、短い人生だったが悔いの残らない人生だったと自分に言い聞かせながら、今までの人生を振り返っていた。

ふと反対側のホームに目をやると、見覚えのある顔が……「いしがみ」……

その瞬間、ホームに入ってきた電車がすぐ目の前に……

いや、俺が電車の前にいるのだろ……避けようとする暇もなく、電車にぶつかった。意識が遠のいて……

本日午前9：05、（山手線）神田駅構内で男性が普通電車にはねられました。男性は全身を強く打ち即死しました。警察によりまずと、目撃者の証言から争っていた様子もなく事故か自殺の両面で調べを進め、身元の確認も急いでいます。

JR東日本によると、救出作業などの為、同線は………

第2の追う者

第2の追う者

当初、警察は暴力団同士の抗争と言うことで捜査を進めていたが、国会議員が同じ方法で殺害されたので、大々的な捜査本部が設置された。

6月26日

捜査員が捜査の状況を報告する

「今回の事件は、両方とも、飛んできた包丁が首や胸などに刺さり死にいたっています。」

警視庁の佐々木係長が会議を進めていく

「包丁の出どころは」

「はい、量販店で販売されていて関東地区の多くの店舗で扱われているものです。」

「出どころから絞り込むのは難しいか。次、鑑識の結果は」

「はい、すべての包丁に犯人のものと思われる指紋は付いていませんでした。犯人は布の手袋などをしていたと思われます。あとはほぼナイフ投げの技術がなければあのように刺さらないんじゃないか」とのことです。」

「サーカスなどか？そちらの関係者も当たってくれ 次」

「はい、犯行は昼間の比較的人通りの多い時間帯や、人の多く集まった場所で行われているのですが、目撃者が出てきません。」

「目撃者無しか」

「古閑 議員に関しても演説中で包丁が刺さるのは多くの人が目撃しているにも関わらず、包丁を投げた人物や怪しい人物をみたものはいませんでした。」

宮本課長が口をひらく

警視庁の捜査一課 課長 宮本俊一郎 警視

彼は若くして捜査一課の課長になった世間が言うキャリアの中でもエリート中のエリートである。

若くして捜査一課の長になった、総勢200を超す捜査員の長なのである。

「皆さん、犯人がどのような方法で殺害したかは、現状わかっていません。しかし、両方の犯行現場に足を運んでいるのは間違い無いはずです。両方の現場に赴いた人物を洗い出してください」

佐々木係長は大きな声で

「それでは犯行現場やその周りの監視カメラを確認し共通する人物を洗い出すように」

「はい！」

一斉に刑事たちが部屋を出ていく。

課長のもとへ一人の刑事が近寄った

「失礼します。ある出版社の記者から情報が寄せられたのですが？」
と言いながら、村沢が持ってきた資料を手渡した。

佐々木が口を開く

「課長、こんな馬鹿げた話がありますか？」

宮本は、もらった資料を読みながら答える。

「確かに馬鹿げた話ですが、こう考えると辻褄が合うのも確かです。しかしこの石神という男は今回の犯人ではありませんね。もう一人犯人がいますね。」

さらに宮本は話を続ける。

「推測ですが実行犯は東京に住んでいるはずですよ」

佐々木が眉間にしわをよせながら

「わかりました。その線で捜査させます。石神を任意で引っ張り出すか？」

「いや、まだやめておきましょう。現状の捜査を進めてください。」

「はい、わかりました」

宮本はひとりで会議室に残り捜査資料を眺めていた。
犯人を逮捕するには現行犯での逮捕か、あとは状況証拠を積み重ねるしかないか。果たして状況証拠だけで立件できるのか？

6月29日

三人目の被害者が出てしまった。会議室は思い雰囲気にも包まれていた。

捜査員の刑事が宮本と佐々木に報告をしていた。

「東京都 港区の路上で 暴力団組長 太田 昭宏 さん（59歳）
が 殺害されました。事務所に入ろうとした時、いきなり首から
血が噴き出したとのことです。」

「検視の結果、首には鋭利な刃物で切られた傷があったとのこと
です。おそらく出血によるショック死だと思われますが、司法解剖を
行うために現在手続き中です。」

続けて佐々木が

「凶器はどうだ」

捜査員が

「いいえ、現在周辺を調査中ですがまだ見つかっていません」

「周辺の聞き込みを行いました、不審な人物も目撃されていま
せん」

「近くにいた同じ組の者たちも取り調べを行いました
が凶器になるような血のついたナイフ等を所持している者はいませんでした。」

宮本が

「三件の現場に共通する人物の洗い出しをお願いします。」

佐々木係長は大きな声で

「それでは引き続きの捜査を進めるように、警察の威信にかけて早

期の犯人逮捕に尽力を尽くすようにお願いします。」

「はい！」

一斉に刑事たちが部屋を出ていった。

佐々木が

「全く手掛かりがありません」

宮本が

「そうですね。殺害方法も判っていません。本当に超能力などあるのでしょうか」

佐々木が

「さあ、私は信じませんが」

7月3日

4人目の被害者が出てしまった。

「東京都 大田区の公民館で 自由民主党の井吹議員が 殺害されました。公演中、壇上でいきなり首から血が噴き出したことです。」

「検視の結果、首には鋭利な刃物で切られた傷があったとのことですよ。おそらく出血によるショック死だと思います。前回の組長殺害と非常に犯行が似ています。」

続けて佐々木が

「凶器はどうだ」

捜査員が

「いいえ、現在周辺を調査中ですがまだ見つかっていません」

「周辺の聞き込みを行いました。不審な人物も目撃されてありません」

「公演を聞きに来ていた人達に聞き込みをしましたが怪しい人物の証言は得られませんでした。」

佐々木係長は大きな声で

「それでは引き続きの捜査を進めるように」

「はい！」

一斉に刑事たちが部屋を出ていった。

宮本が

「今度殺されるのは国会議員の確立が高いですね」

佐々木が

「順番から行けば組長じゃないですか？」

「もし、突然超能力を手に入れたらどうしますか？誰にも見られず人を殺せるような能力」

「はい？」

「推測ですが、組長で能力のテストをしていたのでしょう。その上で国会議員を殺害している。もしそうなら証拠品も残さずに殺害ができたわけですから、これ以上テストは必要ないはずです。」

しばらく宮本は考え込んで

「今洗い出しているリストから日曜日が休みのもので、その中に女性か男性でも比較的非力な者がいないか調べてください」

佐々木が

「どうしてですか？」

「殺害方法がきれいすぎます」

7月6日

ようやく捜査に進展がみられてきた。

刑事が捜査状況を報告する

「犯行当日、太田組長が殺された現場の道を挟んだ反対側の喫茶店で確認された人物がいました。 東東新聞社 政治部の記者 川

口 泰子 34歳 です。」

他の刑事が続けて報告する。

「取材で殺害された2人の国会議員の近くにいました。現在、彼女以外では条件に合う人物は見つかっていません。」

刑事が続けて報告する。

「ちょうど前日に川口の写真を持ったフリーのジャーナリストと名乗る物が川口のことを聞いていたそうです。」

宮本課長がしゃべりだすと周りは静かになった。

「ほかに条件に合うものがないかも一度調べてください。あと、川口 泰子が例の包丁を買っていないか洗ってください。」

宮本は少し声のトーンを落として話をした。

「今後、私からの指示があるまで川口 泰子に接触は避けてください。危険です。」

佐々木係長は大きな声で

「それでは2班に分かれて洗い出しをすすめるように」

「はい！」

刑事たちが部屋を出ていく。

佐々木が話しをする。

「犯人は 川口 泰子でほぼ間違いないですか」

宮本が

「証拠がありませんね」

「そうですね。」

宮本は捜査資料に目を通しながら考えをまとめていた。

7月9日

佐々木が

「あれほど危険だと忠告しているのに演説会はやめないそうです」

宮本が

「今回も川口 泰子はきますね。川口 泰子を重点的にマークしてください。」

佐々木が

「はい、手はずは整っています。」

警察の警護の甲斐もなく志村議員は殺害された。
しかも、川口に不審な動きは一切見られなかった。

宮本は捜査資料を見ながらこの事件の立件の仕方を考えていた。

7月13日 夕方

刑事があわてて会議室に入ってきた。

「川口泰子と 石神圭介が 公園で会っています。」

「何？」 佐々木が大声を出すと

「私が向かいます。」 宮本はそのまま急いで会議室をでていった。
佐々木も急いであとを追った。

所有者3

所有者3

最近、巷で騒がれているニュースを見ていた。

暴力団の組長と国会議員が続けて飛んできた包丁で殺害された。

3人目の被害者はいきなり首から血を噴き出して死亡した。

各マスコミが事件の共通性や犯人像などを競って報道していた。

これは間違いなく能力者の犯行だ。

きつと2人目までの犯行は

（時が止まった中、物をナイフで切りつけても切れない。しかし時が動き出すと同時に、時が止まった中で切りつけた切り口が切れる。つまり、時が止まった中では物体を壊すことはできない。時が動き出すのと同時に破壊が進行する。）

を知らなかった可能性がある。

3人目の殺害で現場に包丁を残さなくても殺害できることを知ったのだらう。

と言うことは、事件を起こしている奴も能力を最近手に入れた。

高橋はこの一連の事件の犯人が私だと思っている。

事件が起こるたびに私の周りで聞き込みをするのだ。かなり迷惑だった。

高橋を殺すか迷っていた。だが、連続殺人の犯人も気になっていた。考え事していると突然携帯電話が鳴り出した。

「ピピピピッ ピピピピッ」

携帯を見ると見覚えのない番号だった。電話にでる。

「もしもし」

「もしもし、はじめまして、連続殺人の犯人です。」

それは女性の声だった。声の感じで年配ではないようだ。

「はい？」

「私もストップウォッチを持っています。」

間違いなく犯人だ。しかしなんと返事をしていいか迷ったが、正直に「あなたがストップウォッチ持っている証拠がありますか？」

「はい、7月3日に自由民政党の井吹議員を殺害します。前回と同じ方法で」

「……」私は言葉を失った。

「7月3日に井吹議員を殺害してからまたご連絡します。」

「お名前を教えて頂けませんか？」

「次に電話する時、教えます。」

「はいわかりました。お電話お待ちしております。」

「ツーツー」

犯人と言う女性からの電話だった。

なぜ、俺の連絡先を知っているのか？最初の疑問だった。

高橋が私から情報を聞き出すために誰かに演技をさせた可能性もある。

それなら辻褄があうが、犯行予告はいつたい……

私がストップウォッチを持っていることを確信していた。

……考えられるのは……

もし、能力者が高橋の資料を読めば私がストップウォッチを持っていることはわかるはずだ。

今考えても答えは出ない。7月3日を待つしかないか。

7月3日 当日、速報で井吹議員の殺害が報道された。

前回の組長同様、いきなり首から血を噴き出して死亡した。殺害方法も予告通りだった。

夕方に彼女から電話があった。

「はい、石神です。石神 圭介です。お電話お待ちしております。」

「信用していただけましたか？」

「はい」

「私は川口 泰子と申します。」

「なぜ、私に電話をしたのですか？」

「同じ能力を持つているからです。電話をした理由は、たぶん今の気持ちを聞いて頂いて、あなたの意見も聞きたいと思ったからです。私も最近この能力を手にしました。いろいろ悩んだ結果、いままで心の奥でくすぶっていた思いを行動にすることにしました。」

「それが今回の殺人ですか？」

「そうです。一部の政治家の所為で本当に日本の為に世の中を変えようとする者は育ちません。今の日本からその一部の腐った政治家を削除したいのです。その一部の腐った政治家は利権しか追及せずに国民のことなど考えようとしません。いくら国民の為にがんばろうとする政治家がいてもつぶされてしまいます。ましてや国民の為に政治家を志す者など……虫けらのようにひねりつぶされます。」

「……………私は日本の政治を変えたいのです。これが私の考えです？」
「……少し、間をおいてから、」

「すごいことだと思います。私にはそこまで考えることはできませんでした。」

「しかし、あなたも自分自身の為に能力を使っていないじゃないですか？」

「そうですね。でも、あなたはすごいと思います」

「まだ、この殺人を続けます」

「はい、わかりました。私もできるだけ協力します。しかし、高橋と言う自称ジャーナリストにマークされていますので、簡単には動けないんです。」

「はい、高橋君のことは知っています。また、ご連絡します。」

電話を切ってから、深呼吸をした。

話を聞いた限りおそらく個人的な復讐……ストップウォッチを持たなければ……よかったのに……

思考を切り替えてこれからの対応を考えなければ。

彼女がこのまま暴走を続けて警察に捕まり、ストップウォッチの存在が警察ばれるのは、最悪の展開だ。何とか手を打たなくては……

高橋君と言っていた。……高橋の同級生か先輩か

一つ言えるのは、高橋も川口を知っている。

しょうがない高橋に探りを入れてみるか。

携帯電話と取り出し、

ツルルルル、ツルルルル

電話に出ると高橋は元気な声で話を始めた。

「もしもし、お久しぶりです石神さん」

「高橋さんは今、東京ですか？」

「朝から晩までこちらで調査をしております」

「いい加減、殺人事件が起こるたびに私の周りで聞き込みするの、やめてもらえませんか。職場の周りの人から変な眼で見られてしまいます。」

「すべて話して頂けると、こちらでも聞き込みしなくてもすむのですが」

高橋は川口とどんな関係だろう？この疑問が残るままだが……

「高橋さん、あなたは勘違いをしていますよ。」

「そうでしょうか？私はあなたが犯人だと思っています。」

「今回の連続殺人犯、誰が犯人か教えてあげましょうか？」

「なに！」

「最近、あなたの資料等を見た女性が犯人です」

「なぜ、それを」

かなり動揺している様子だ。

「では、取材ががんばってください」

「ピッ」

電話を切った。

あの動揺の仕方から、高橋は川口が犯人だと知らない。「なぜ、それを」と言っているので、おそらく資料は見せたことがある。そう

考えると辻褄が合う。彼女は高橋の資料をみて私の電話番号を知った。

あとは高橋がどう出るかだ。

数日後、志村議員が公演中に殺害された。

殺害状況を見るなり、これも川口の仕業だろう。

さて、どうしたものか？

高橋が何らかの証拠をつかみ、逆に川口が高橋を殺害することを期待しているのだが……

今の所、動きはないか……

ツルルルル、ツルルルル
川口からの電話であつた。

「こんばんは、川口さん」

「こんばんは」

「志村議員も、あなたですよね？」

「はい、そうです。実は高橋君に感づかれたみたいです。」

内心はドキツとしたが、平常心を保ちながら

「そうですか、それでどうしますか？」

「じつは……」

「どうしました？」

「実は、本当に殺害したかったのは、古閑 と井吹 だけだったんです。でも」

彼女は電話越しに泣きながら話をする。

「志村議員が死ぬのをみて、なんとも言えない感覚が……恐怖感が襲ってきたんです。」

良心の呵責と言うやつか。

「まず、高橋を何とかします。どこに寝泊まりしているか知っていますか？」

「神田駅近くのセントラルシティホテルだと言っていました」

「わかりました。高橋の件は任せてください。それと、今度会ってゆっくりお話しませんか？もしよろしければ明後日の日曜日お時間ございますか？」

「明後日の日曜日のお昼に、高橋君に呼び出されています。」

「わかりました。その場所には私が行きます。日曜日の3時に待ち合わせしましょう。場所は……そちらがあまり詳しくないので静かにお話ができる場所連絡ください。」

日曜日、高橋の止まっているビジネスホテルの前で高橋の出てくるのを待っていた。

高橋は私に気が付かないようで駅に向かって歩いていった。見るからに思い悩んでいるようだった。俯いて歩いている。

高橋の向う一本奥のホームに急いで向かった。

線路を挟んだ向かいのホームに着くと、高橋は下を向いて考え事をしている様子だ。電車が入ってくると。

高橋がまっすぐ真正面を見た。私に気がついたらしく私の名前を呼んだ「いしがみ」

その瞬間、ストップウォッチを押した。

「ピッ」

制止する時間の中、急いで線路を横断した。高橋が持っていたバツクを開けると、中にはノートパソコンが一台と今まで調べ上げた資料が一冊、あとはめぼしい物はなかった。ノートパソコンと資料を取り出してから、鞆を閉めた。高橋が入ってきた電車の前に突き飛ばした。最初にいたホームに戻り、ポケットの中からストップウォッチを取り出す。

「ピッ」

時間が動き出す。先ほどのノートパソコンと資料を自分のカバンに詰め込み、ゆつくりと歩きだした。

待ち合わせの公園のベンチで座って待っていると、すらつとしたスーツを着た女性がこちらに歩いてきて目の前で止まった。

私は立ち上がり、

「お会いするのは初めてですね、石神圭介と言います。」

「はじめまして、川口泰子です。」

「どうぞ、座ってください。」

「はい」泰子はベンチに腰をおろした。

「これが私のストップウォッチです。」

石神はストップウォッチをポケットから出して見せた。

「これがわたしのです。」

泰子も同じくストップウォッチを見せた。同じ黒色だった。

「色も同じですね。マニュアル読みましたか？」

「はい。」

「僕なんか英語ができないので翻訳するのが大変でした」

「わたしもです」

少し無言のあと石神は話を始めた。

「先日のお話の続きですが、」

「実は、今回の殺人は復讐だったんです。本当に殺したかったのは古閑と井吹だけだったんです。私の恋人が古閑の秘書をしていました。彼は将来政治家になって自分の為にではなく国民の為の政治をすると言っていました。しかし、8年前の政治献金が消えた問題で当時秘書だった彼は会計責任者として責任をおしつけられ、最後に自殺しました。」

川口はハンカチを取り出し眼がしらを抑えながら話をすすめた。

「もちろん彼はそんなことはしていません。私なりに調べました。訴えるほどの確証は得られませんでした。事件の概要はわかっってきました。その黒幕が古閑と井吹だったのです。」

「そうでしたか……」私は静かに答えた。

「しかし、その事件には関係のない、志村議員を殺して……死ぬのをみて、ここ数日、夜も眠れずなんとも言えない恐怖が襲ってくるんです。」

「そうですか」

……少し沈黙の後私は話だした。

「高橋はこの能力をおおよそ知っていました。」

「はい、私も資料を見せてもらったのでそれは知っていました。」

「その上で、高橋はあなたが犯人であると突き止めたみたいです。」

「やはりそうですか、今日、お昼に約束の場所に行ったのですが、高橋君は来ませんでした」

「彼は亡くなりました」

「あなたが………そうですか」

「警察もあなたをマークしているみたいですし。これからどうしますか？」

「もう疲れたので……自首し」

彼女の言葉をさえぎるように

「逃げてください。いや、絶対に警察に捕まらないように逃げてください。貴方のとった行動はいずれこの日本の為になるはずです。」
泰子は私の顔を見ている。

「今頃、利権にまみれた政治家は毎日恐怖と闘っていることでしょう。公演などできないはずですよ。あなたは逃げてください。そうすればあなたの恋人の様な素晴らしい政治家が出てきます。きっと彼もそれを望んでいるじゃないですか？あとは私が引き継ぎます。」

「逃げるってどこに」不安そうに私を見つめる

「お金は私が用意します。東京を離れてください。」

「ですが………」

静かな時間が流れた。私は周りの様子をうかがっていた。

「やっぱり来ました。警察です。」

「えっ」

「泰子さん 逃げてください。ここは私が引き受けます」

「え……………」

「早く！！」私は大きな声をだした。

泰子は交通量の多い道路の方に走り出した。あわてて警察も泰子を追いかけた。

——泰子は走りながら——

今はとにかく逃げよう。きっと彼もそう思っている。自分を正当化することが、この恐怖感を取り除いてくれる。

走りながら後ろをみた、スーツを着た男たちが追いかけてくる。

右手でストップウォッチを持つとボタンに親指をかけ、交通量の多い道路に飛び出した。その瞬間にストップウォッチのボタンを押す。

「ピッ」

その瞬間 私の周りの雑音が消えた。

私は公園のベンチから立ち上がると、足もとにしるしをつけた。ゆっくりと道路の方に歩きだす。

私は動かない泰子の右手からストップウォッチを取り上げる。

また公園のベンチへもどり足もとのしるしに合わせベンチに腰をおろした。

私は泰子から取り上げたストップウォッチをポケットに入れて時間が動き出すのをまつた。

「ピッ」

「キキーーーー、ドスン」

鈍い音とともに泰子の体は吹き飛ばされ地面に叩きつけられる。

刑事たちはあわてた様子で大きな声を出している。

私は泰子が持っていたストップウォッチのプレートを見た。
やはり名前が消えていた。

泰子は今、所有権を失った。つまり死亡したことになる。

私はベンチから立ち上がり交通事故のあった方向を見つめた。

「石神圭介さんですね」

振り返り私は答えた。

「あなたたちは？」

男は警察手帳を見せ

「警視庁捜査一課の宮本と言います。」

私は悔しそうに話した。

「彼女はあなたたちを恐れていました。だから逃げだしたんす。彼女が何をしたと言うのですか？」

「下手な演技はやめてください。今度はあなたを捕まえます。」

そう言う宮本はクルツと振り返り部下を引き連れて帰って行った。

すべてお見通しか。

彼女は復讐の為に殺人を繰り返した。しかしそれを正当化するために、世の中の為になど大義を得ようとした。

しかし、復習が終わると彼女も気づいたのだろう。人を殺したと言う事実を……

良心の呵責に耐えられなくなった。そのまま出頭されれば警察にストップウォッチのことがばれる。それは私にとって非常にまずいことだ。

最初から計画していた。

お互いにストップウォッチを見せ合った後、私のストップウォッチと彼女のストップウォッチを交換した。彼女が私を殺そうとした時

の保険の為に。

そう、彼女は自分の時間を止めようとして、私のストップウォッチのボタンを押したのだ。

ちなみに私のストップウォッチのプレートの名前も消えていた。

『最後に時間を止めた人が死亡した場合、現在の所有者の所有権は強制的に放棄されます。』

」

もう一度自分のストップウォッチのボタンを押す。

「ピッ」

今は他人を犠牲にしても、私の生活を守りたい。

——ただそれだけだ——

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7209e/>

ストップウォッチ

2010年10月10日01時45分発行